

## 孟郊の文学

著者	松本 肇
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	47
ページ	83(84) - 100(67)
発行年	2005-03-31
その他のタイトル	The Literature of Meng-Jiao
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/9886">http://hdl.handle.net/2241/9886</a>

## 孟郊の文学

松 本 肇

### はじめに

孟郊（七五一—八一四）、字は東野、湖州武康（浙江省德清県）の人である。韓愈の門弟のひとりで、買島と並び称される。父親は庭玢、母親は裴氏。父親は、孟郊と二人の弟が生まれてから亡くなった。孟郊は若い頃、崇山（河南省登封県の北）に隠棲している。その後、河陽（河南省孟県）、上饒（江西省上饒）、蘇州（江蘇省）などを転々とする。孟郊が、湖州の郷貢進士（州県の長官推薦の科挙受験生）に選ばれ、進士科受験のため長安に上ったのは、貞元七年（七九一）、四一歳の秋であった。母親に受験を命じられたのである。しかし、貞元八年（七九二）、貞元九年（七九三）と続けて落第し、進士に合格したのは、貞元十二年（七九六）、四六歳のときだった。それから四年後、貞元一六年（八〇〇）、五〇歳のとき、再び母親に命じられて、洛陽で任官試験に応募し、溧陽（江蘇省溧陽市）県尉（従九品下）に選任される。だが、山水に遊んで仕事を怠けたために、給与を半減された。貞元二〇年（八〇四）、五四歳で溧陽県尉を辞任。元和元年（八〇六）、五六歳、鄭余慶の上奏により、河南水陸運使軍、試協律郎（正八品上）に任官し、洛陽の立德坊に住居を定める。以後、元和八年（八一三）、六三歳まで洛陽に住む。元和九年（八一四）、山南西道節度使鄭余慶の上奏により、興元軍參謀、試大理評事（従

八品下)を拜命し、洛陽から興元(陝西省南鄭県)に赴く途中、急病のため河南省閿郷県で死ぬ。享年六四。  
 四六歳で進士に合格し、五〇歳ではじめて任官というのは、官僚としてきわめて遅いスタートである。しかも、溧陽県尉の職を得たとき、孟郊は不満だった。師の韓愈は「送孟東野序」(昌黎先生集 卷一九)を書いて、不満があるからこそすぐれた文学が生まれると、孟郊を慰めた。孟郊の不満は、どのような文学を生み出したのだろうか。以下、孟郊の文学について考察する。<sup>〔1〕</sup>

## 一 賢者の処罰

青々と茂る松は、冬の寒さにも枯れない。その姿は、逆境にも屈しない固い節操や、高潔な人格にたとえられる。陶淵明「飲酒二十首」其八(『陶淵明集』卷三)の冒頭でも、「青松在東園、衆草没其姿。凝霜殄異類、卓然見高枝」、青い松は庭の雑草に隠れているけれども、霜がほかの草木を枯らすと、ひととき高くそびえているのが分かる、と松の姿を讃えている。ところが、孟郊は、そのような松の姿を非難する、「罪松」(卷二)と題する詩を書いている。

1 雖為青松姿	青松の姿を為すと雖も
霜風何所宜	霜風 何の宜しき所ぞ
二月天下樹	二月 天下の樹
緑於青松枝	青松の枝よりも緑なり
5 勿謂賢者喻	賢者の喻と謂うこと勿れ
勿謂愚者規	愚者の規と謂うこと勿れ
伊呂代封爵	伊呂 代々封爵せられ

夷齊終身飢

夷齊 終身飢う

彼曲既在斯

彼の曲 既に斯に在り

10 我正実在茲

我的正 実に茲に在り

涇流合渭流

涇流 渭流に合し

清濁各自持

清濁 各々自ら持す

天令設四時

天 四時を設けしめ

榮衰有常期

榮衰 常期有り

15 榮合隨時榮

榮ゆるには合に時に随いて榮ゆべし

衰合隨時衰

衰うるには合に時に随いて衰うべし

天令既不從

天令 既に從わず

甚不敬天時

甚だ天の時を敬わず

松乃不臣木

松は乃ち不臣の木なり

20 青青独何為

青青 独り何為るものぞ

この詩は、第一―六句で、「青松」と「二月の樹」（春の樹木）を比較しながら、その優劣を論じている。はじめに、霜風に屈しないと見られている高潔な松の姿に疑問を投げつけ、霜風と松は相性がよくないと、常識的な見方をくつがえす。次に、春の盛りには、世の中の木が松よりも鮮やかな緑色になるといふ。そして最後に、「青松」を「賢者」、「二月の樹」を「愚者」と見なす考え方に反論する。常識的に見れば、松は一年じゅう青く輝き、二月の樹は冬になれば枯れてしまうので、「青松」≡「賢者」、「二月の樹」≡「愚者」という見方が成立するだろう。だが、孟郊はそのような既成の価値観を逆転させる。

第七―一〇句は、植物から人物に話題を転じて、「賢者」と「愚者」の例を挙げる。「伊呂」は、伊尹と呂尚。

伊尹は、殷の処士だったが、湯王を助けて建国に尽くした。呂尚は、太公望のことで、周の文王と武王を輔佐して、齊侯に封じられた。処士で、海辺に隠れていたともいう。伊尹と呂尚の二人は、子孫の代まで栄えたので、世間的に見れば成功者に属する。「夷齊」は、伯夷と叔齊。殷の孤竹君の二子で、周の武王が紂王を討とうとするのを諫めたが聞き入れられず、周に仕えるのを恥じて、首陽山に隠れて餓死した。「伊尹・呂尚」と「伯夷・叔齊」を、「賢者」と「愚者」の対比に当てはめれば、前者が「賢者」、後者が「愚者」ということにならざるを得ない。ところが、孟郊は、伊尹と呂尚の二人は誰にも仕えずにいたのに、志を曲げて世に出たと考えているので、正義は伯夷と叔齊に存すると見ている。つまり、孟郊は「愚者」の生き方に共感するのである。

第一一〇一六句は、人物から再び自然の世界に目を転じて、時の流れに従うべきことを述べる。すなわち、濁った涇水と、清らかな渭水のどちらにも特色があるように、天は四季の区別を設けたのだから、栄えるのも衰えるのも自然の法則に従うのがよいという。言い換えれば、冬になっても枯れない松を、自然の法則に逆らっていると、暗に非難していることになる。

第一七〇二〇句は、詩題の「罪松」に対応し、松を処罰する理由を述べる。天の命令に従わず、自然の法則を尊ばない。これが、松を処罰する理由にほかならない。こうして、孟郊は、青々と茂る松を「不臣の木」、つまり反逆者として断罪するのである。

この詩を読んで、孟郊がほんとうに松を処罰しようとしている、と考える人はいないだろう。孟郊は「寓言」(卷二)の中で、「誰言碧山曲、不魔青松直」と、山のすみでも曲がらずにまっすぐ伸びる青い松を讃えているのである。ほかと歩調を合わせられない、時流に従わない。このように孟郊が松を非難する理由は、そのまま賛美のことばにもなっていることを見落としてはならない。

孟郊が「罪松」で述べている、時の流れに従うべきであるという考え方は、委順の思想と呼ぶことができる。それは、白居易の思想の根底に流れているものであった。孟郊と白居易の二人は、しばしば比較される。例えば、宋の呉処厚は「青箱雜記」巻七で、白居易「偶作二首」其一(朱金城『白居易集箋校』巻二二、上海古籍出版社、

一九八八)の「無事日月長、不歸天地闊」を「曠達者の詞」、孟郊「贈崔純亮」(卷六)の「出門即有礙、誰謂天地寬」を「徧隘者の詞」と言う。天地は広いのに、孟郊は自分で障害を作り出している、と心のせまさを非難している。ただし、これには反論があつて、宋の呉玠『優古堂詩話』では、孟郊の詩句は、杜甫「送李校書二十六韻」(『杜詩詳註』卷六)の「每愁悔吝生」(『杜詩詳註』では「生」は「作」になっている)、如覺「天地窄」にならつたのだという(『誰謂天地寬』)。清の賀裳『載酒園詩話』卷一(郭紹虞編選『清詩話統編』一、上海古籍出版社、一九八三)になると、孟郊と白居易を比較するのが間違っていると述べている。白居易は翰林学士、左拾遺を授かり、江州に左遷されても、官は五品、月俸は四、五万あつた。それに対して、孟郊は、五〇歳でやっと得たのが溧陽県尉にすぎなかつた。孟郊の境遇を考えれば、白居易とは比較できない、というのが賀裳の意見である。孟郊と白居易の二人は、タイプの異なる詩人としか言いがたない。宋の葛立方『韻語陽秋』卷一八では、孟郊を「非能委順者」、つまり自然のなりゆきにまかせて生きられない人間、と言つて非難しているけれども、それが孟郊の個性にはかならないのだと思う。孟郊が「罪松」で、時の流れに従うべきであると述べたのも、それが不可能であるゆえにあえて宣言した、と見なすこともできるだろう。

孟郊は、賢者として讃えるべき青い松をかえつて処罰した。処罰は、松の正しさを逆説的に証明する方法であつた。なんと屈折した、自虐的な方法だろう。そして、自虐と快感は、紙一重である。

## 二 快樂としての悲愁

宋の歐陽修は『六一詩話』の中で、孟郊と賈島の特色が、困窮の表現にあることを次のように指摘する。

孟郊、賈島皆以詩窮至死、而平生尤自喜為窮苦之句。孟有移居詩云、「借車載家具、家具少於車。」乃是都無一物耳。又謝人惠炭云、「暖得曲身成直身。」人謂其身備嘗之不能道此句也。賈云、「鬢邊雖有糸、不堪織寒

衣。」就令織得、能得幾何。又其朝飢詩云、「坐聞西牀琴、凍折兩三絃。」人謂其不止忍饑而已、其寒亦何可忍也。

孟郊・賈島は皆詩を以て窮して死に至る。而して平生尤も自ら喜んで窮苦の句を為る。孟に「移居詩」有りて云う、「車を借りて家具を載すれば、家具は車より少なし」と。乃ち是れ都て一物無きのみ。又「人の炭を恵まるるに謝す」に云う、「曲身を暖め得て直身と成す」と。人は謂う、其の身備に之を嘗むるに非ざれば、此の句を遣う能わざるなりと。賈云う、「鬢辺 糸有りと雖も、寒衣を織るに堪えず」と。就令織り得るも、能く幾何を得ん。又其の「朝飢詩」に云う、「坐して聞く 西牀の琴、兩三絃を凍折すること」と。人は謂う、其の止だ饑えを忍ぶのみならず、其の寒さも亦何ぞ忍ぶべけんやと。

歐陽修は、孟郊の詩を二つ例に挙げている。「移居詩」というのは、孟郊の詩集では「借車」(巻九)と題する詩のことである。参考までに全体を引用しておく。

借車載家具	車を借りて家具を載すれば
家具少於車	家具は車より少なし
借者莫彈指	借す者 彈指する莫れ
貧窮何足嗟	貧窮 何ぞ嗟くに足らん
百年徒校走	百年 徒らに校走す
万事尽隨花	万事 尽く花に隨う

この詩は、引つ越して家具を運ぶ荷車を借りたところ、家具の方が荷車よりも少なかった、と歌っている。歐陽修は、冒頭の二句が、貧乏でなにもないようすを巧みに表現していると見たのである。「謝人惠炭」というの

は、「答友人贈炭」(巻九)と題する詩のことで、全体は次のようになっている。

青山白屋有仁人 青山の白屋に仁人有り

贈炭僮重双鳥銀 炭を贈られ 価は双鳥銀より重し

驅却坐上千重寒 坐上千重の寒を驅却し

焼出炉中一片春 炉中一片の春を焼出す

吹霞弄日光不定 霞を吹き日を弄び 光定まらず

暖得曲身成直身 曲身を暖め得て直身と成す

この詩は、寒さに苦しんでいるとき、貴重な炭を贈ってくれた友人に感謝の気持ちを述べたもので、火を燃やして暖かくすると、曲がった体がぴんとまっすぐに伸びた、と歌っている。この最後の句について、欧陽修は、実際に体験した者でなければ書けない、という批評のことばを記す。

なお、賈島の句で詩題の記していないのは、「客喜」と題する詩の一節である。「朝飢」とともに、『唐賈浪仙長江集』巻一に収められている。浪仙は、賈島の字で、閩仙とも書く。

孟郊における困窮の意味について考えようとするとき、欧陽修が「喜んで窮苦の句を為る」と述べていることに注意しよう。欧陽修にはまた、孟郊と賈島の貧窮を比較した、次のような文章がある。この文章は、宋の張邦基が『墨莊漫錄』巻八の中で、欧陽修の文集には載っていないが、都の貴人の家で見つて写した、といって紹介している。

唐之詩人類多窮士。孟郊、賈島之徒、尤能刻琢窮苦之言以自喜。或問「二子其窮孰甚。曰閩仙甚也。何以知之。曰以其詩見之。郊曰、「種稻耕白水、負薪斫青山。」島云、「市中有樵山、我舍朝無煙。井底有甘泉、釜中乃



空然。」蓋孟氏薪水自足、而烏家柴水俱無。誠可笑。然二子名称高於當世。

唐の詩人は類窮士多し。孟郊・賈島の徒は、尤も能く窮苦の言を刻琢し以て自ら喜ぶ。或るひと問う、二子其の窮すること孰れか甚しきと。曰く、閻仙甚しきなりと。何を以て之を知る。曰く、其の詩を以て之を見ると。郊曰く、「稲を種えて白水に耕し、薪を負いて青山に斫る」と。島云く、「市中に樵山有るも、我が舍に朝煙無し。井底に甘泉有るも、釜中は乃ち空然たり」と。蓋し孟氏は薪水自ら足れり。而るに烏家は柴水俱に無し。誠に笑うべし。然れども二子の名称は當世に高し。

この話は、孟郊と賈島はどちらが貧乏か、という問いに對して、両者の詩を証拠に挙げながら、賈島の方が貧乏である、という結論を導く。ここに引用する孟郊の句は、「退居」（卷二）と題する詩の一節。白水で耕作し、青山でたきぎをとるようすを描いている。賈島の句は、『六一詩話』にも引用する「朝飢」の前半。たきぎはおろか米さえなく、炊事もできないと歌う。第二句の「我」という字は、『唐賈浪仙長江集』では「此」になっている。孟郊にはたきぎも水もあるのに、賈島にはないから、賈島の方が貧しいという。右の文章で、「窮苦の言を刻琢し以て自ら喜ぶ」と述べていることに注意しよう。また、「誠に笑うべし」とも言っている。「喜ぶ」「笑う」ということばは、困窮の概念と結びつきにくい。どうして、このようなことばが用いられるのだろうか。ここで、孟郊における困窮の意味について考えなければならぬ。

孟郊は、困窮の表現が得意だった。そのような孟郊の詩風に對して、さまざまな見方がある。宋の嚴羽は『滄浪詩話』（詩評）の中で、「孟郊之詩刻苦、讀之使人不歡」、孟郊の詩は苦痛にあふれて、読者を不快にするとして述べている。芦立一郎氏もまた、「暗い世界への志向」を指摘する。一方、賈晋華氏によると、孟郊の困窮の表現は、儒家の「君子固窮」（『論語』衛靈公第一五）の信念と寒門士族の境遇が結合したものだといふ。また、山之内正彦氏は、孟郊のはじめさを「意図的に突き出され仮構されたはじめさである」と見なす。横山伊勢雄氏も、孟郊の不遇や貧窮を「虚構的増幅」と言っている。孟郊の詩における「暗い世界への志向」は否定できない。

たいせつなのは、そこにどのような積極的意義を認めうるか、ということだと思う。赤井益久氏は、孟郊の「苦吟」や「貧窮」について、「往時の得意当路の文学者の態度の対極に己れを置くことで、批判を伝える意志表白としたのではなからうか」と述べている。赤井氏は、孟郊の困窮に批判精神という積極的な意義を見出す。蕭占鵬『韓孟詩派研究』（南開大学出版社、一九九九）では、韓愈と孟郊の中国詩歌發展史上の意義を、伝統的な美意識に反逆した「不美の美」の追求に認めている。孟郊「借車」の「借車載家具、家具少於車」という描写についても、「無有」の美、という特色を指摘する（一六四頁）。本来あるべきものがない、というところに逆説的な面白みを発見するのである。引つ越し用の大きな荷車の上に、ぼつんと小さな家具が置かれている。このアンバランスな光景は、みじめさを通り越して滑稽ですらある。困窮の表現は、悲愁の感情と結びつきやすい。そして、人には悲愁の感情を喜ぶ傾向がある。

王運運・楊明『魏晉南北朝文学批評史』（上海古籍出版社、一九八九）は、晋の武帝が詔勅を下して「愁思の文」を作らせたことに触れながら、その背景に悲愁の情を楽しむ美的心理が普遍的に存在したことを指摘している（一一二頁）。歐陽修が、孟郊と賈島は困窮の表現を喜んだ、と書いたとき、おそらく悲愁の情を楽しむという認識があっただろう。歐陽修はしばしば、「文学のたのしみ」について言及する。欧陽修から見れば、困窮の表現は、「文学のたのしみ」にはかならなかった。孟郊が困窮していたことと、それを詩で表現することとは、まったく別の問題なのである。現実生活では困窮に苦しめられていたかも知れないが、それを詩で表現するとき、孟郊は楽しんでゐる。孟郊と賈島の貧窮を詠じた詩を思い起こそう。それは、貧窮歌合戦と呼んでもよい。貧窮を娯楽にしている。自虐的な快感を求めたとも言える。私は、孟郊の貧窮を詠じた詩を読むたびに、あがた森魚の「赤色エレジー」を連想する。ひたすら暗い旋律で「幸子と一郎の物語」を歌い上げた後に、「お泪頂戴ありがとう」といつて曲を結ぶ。孟郊もまた、暗い歌をうたいながら、心の底で「お泪頂戴ありがとう」とつぶやいていたかも知れない。このつぶやきを聞き取れなかった嚴羽は、孟郊の詩が読者を不快にすると述べた。このような批評を、孟郊は当然予想しただろう。困窮の表現を喜んだ、と書いた欧陽修には、「お泪頂戴ありがとう」

という孟郊のつぶやきが聞こえていたに違いない。

悲しい内容の詩が、悲しい気持ちを引き起こすとはかぎらない。ギリシア悲劇にカタルシスの作用があるように、悲愁の詩は人間の心を清めてくれる。悲しい内容に感動して、涙と一緒に悲しみが流れ出す。涙にはインターフェロンが含まれているので、ナチュラルキラー細胞を活性化する働きがあるという。泣くことによってかえって元気になる。悲愁は快感をもたらす。悲愁を快楽にまで高めたところに、孟郊の功績があると言つてよい。

### 三 悪意の文学

宋の蘇軾は「祭柳子玉文」〔蘇軾文集〕巻六三、中華書局、一九八六〕の中で、孟郊と賈島の詩の特色を「郊寒島瘦」ということばで批評した。孟郊は寒く、賈島は瘦せているという。「寒」「瘦」という評語は、孟郊と賈島の詩を否定したものではない。蘇軾は、そこに新しい美意識の発見を認めるのである。孟郊の「寒」について考えるには、孟郊の詩における寒さの表現に注目しなければならないだろう。ここでは、「寒地百姓吟」(巻三)を例に挙げて、孟郊が寒さをどのように描いているか見てみよう。この詩には、「為鄭相、其年居河南、畿内百姓、大蒙矜卹」という自注がついている。宰相をつとめた鄭余慶が河南尹となり、人民のために尽くしたのを讃えた詩で、元和元年(八〇六)、五六歳の作。孟郊は鄭余慶の下で、河南水陸運使、試協律郎の職に就いていた。

1 無火炙地眠 火の地を炙りて眠る無く

半夜皆立号 半夜 皆立ちて号ぶ

冷箭何処来 冷箭 何処より来る

棘針風騷勞 棘針 風 騷勞す

5 霜吹破四壁

霜吹 四壁を破り

苦痛不可逃

苦痛 逃るべからず

高堂搥鐘飲

高堂 鐘を搥ちて飲み

到曉聞烹炮

曉に到るまで烹炮を聞く

寒者願為蛾

寒き者は蛾と為り

10 焼死彼華膏

彼の華膏に焼死せんことを願う

華膏隔仙羅

華膏 仙羅を隔て

虛遶千万遭

虚しく遶ること千万遭

到頭落地死

到頭 地に落ちて死し

踏地為遊遨

地を踏みて遊遨を為す

15 遊遨者是誰

遊遨する者は 是れ誰ぞ

君子為鬱陶

君子 為に鬱陶たり

この詩は、前半と後半に分けることができる。前半八句は、河南の人民が寒さに苦しむようすを描く。第一・二句は、貧しい人間には暖房の手段もなく、夜中に寒さで目が覚めるのをいう。第三・四句は、寒さが肌突き刺さるのをいう。「冷箭」(冷たい矢)、「棘針」(いばらのとげ)は、ともに寒風のたとえ。第五・六句は、冷たい風が四方の壁を突き抜けるので、逃れる場所がないのをいう。「霜吹」は、寒風を指す。第七・八句は、貴人の家では、音楽を演奏して宴会を開いたり、おいしい料理を作ったり、ぜいたくな生活を送っているのをいう。貴人の豊かな生活と対比することによって、貧しい人民の悲惨な生活が強調されることになる。

後半八句は、寒さから逃れる方法を記す。第九・一〇句は、寒さに苦しむ者が、蛾に変身して、灯火に焼かれたいと願っているのをいう。韓愈の「苦寒」(『昌黎先生集』卷四)に、冬の寒さに苦しむ雀を描いた句があり、

「不如彈射死、却得親魚鱗」、はじきだまで射られて死に、丸焼きにされるか茹でられるかして、暖まる方がよい、と言っている。貞元一九年（八〇三）の作。孟郊の句と共通点があるだろう。第一一・一二句は、灯火がうすぎぬで隔てられているので、蛾は部屋の間をぐるぐるまわるばかりという。第二三・三四句は、蛾が地面に落ちて死に、遊樂する者に踏みつけられるのをいう。苦痛の中で死ぬ貧しい人間と、享樂にふける富んだ人間を再び対比しながら、貧富の差があまりにも大きいことを述べている。第一五・一六句は、君子、つまり鄭余慶が、貧富の差に心を痛めるのをいう。

この詩の自注に、畿内の人民が鄭余慶の恩恵を受けたと言っているけれども、鄭余慶がどのような政治を行ったのかは述べていない。最後の二句で、わずかにそれを暗示しているにすぎない。この詩の眼目は、貧しい人間が寒さから逃れるために、蛾に変身して火の中に飛びこむという、狂気の行動を描いたところにあるだろう。それはもちろん想像の世界である。想像の世界であればこそ、自由に描くことができる。孟郊の句が、韓愈の「苦寒」に基づくとしよう。韓愈は「苦寒」の最後を、天に向かって正常な氣候の回復を願うことばで結んでいる。また杜甫は、暴風で家が壊されたとき、「茅屋為秋風所破歌」〔杜詩詳註〕卷一〇の中で、「安得広厦千万間、大庇天下寒士俱歡顔」と書いて、世界じゅうの貧しい人間を收容する大きな建物を幻想した。孟郊も、想像の世界で自由に翼を広げ、杜甫や韓愈のように、明るい未来を夢想することもできたはずである。だが、そうしなかった。孟郊にとって、貧しい人間が寒さから逃れる解決法は、蛾となつて火の中に飛びこむことだった。つまり、死が唯一の救いなのである。孟郊は、幻想の中でも死を求める。これは、死の賛美にほかならない。

孟郊に「古怨」（卷二）と題する詩があり、次のように歌っている。「試妾与君淚、兩処滴池水。看取芙蓉花、今年為誰死。」男と女が相思の涙を池に流し、芙蓉の花がどちらの涙で死ぬかによって、愛情の深さを比べ合う、という内容である。馬承五「中唐苦吟詩人綜論」〔文学遺産〕一九八八年第二期）は、この詩を例に挙げて、苦吟派の詩人に死を賛美する傾向があることを指摘する。ここでは、美の破壊、つまり芙蓉の花の死によって、愛情の忠誠というもうひとつの美が獲得される。芙蓉の花の死は、美の象徴であり、崇高な意義を體現していると

いう。死の賛美は、「寒地百姓吟」にも認められる。ただし、この中で、蛾はけつきよく火の中に飛びこんで死ぬことさえできない。うすぎぬに妨げられて、地面に落ちて死んでいる。火の中に飛びこんで死ぬことができれば、それは満たされた死と言えよう。そこでは、死は、生への渴望を反面から充足する。だが、孟郊は蛾のために、目的を遂げずに死ぬという不条理な結末を用意した。もはや、死は救いでさえない。孟郊の詩には、救いがない。いや、意図的に救いを拒絶している。蛾に満足な死すら与えず、不幸のどん底に突き落とす。そこに孟郊の悪意を感じるのは、私だけだろうか。

孟郊の描く自然は、悪意に満ちている。「峽哀十首」(巻十)では、峡谷が巨大な竜に変身して、旅人の命を狙っている。<sup>(11)</sup>「寒溪九首」(巻五)を見ると、「其三」では、波が凍って刀となり、かもとかもめを切り裂く。「其七」では、尖った雪が魚の心臓に突き刺さる。<sup>(12)</sup>風景をことばで表現するとき、その人の世界観が投影される。人は心でとらえた風景しかことばにすることはできない。悪意に満ちた自然を描くということは、孟郊の悪意を物語る。残酷な自然の姿を描くとき、孟郊自身が殺人者に変身している。また、交友のあり方を述べるときも、プラス面には触れず、マイナス面ばかりに注意を促す。<sup>(13)</sup>交友のプラス面をあえて無視するところにも、孟郊の悪意を感じさせる。孟郊の文学は、悪意の文学という一面を持っている。それが、孟郊の新しさとも言えよう。悲愁が快感をもたらすように、悪意も快感に通じるので、両者は表裏一体の関係にあると見なすことができるだろう。

#### 四 詩人の使命

悪意の文学、と私は書いた。そもそも、孟郊にとって、詩を作るということとは、どういうことを意味したのだろうか。孟郊に「贈鄭夫子魴」(巻六)と題する詩があり、詩歌の創作に対する見解を述べている。鄭魴という人物に贈った詩。

1 天地入胸臆	天地 胸臆に入り
吁嗟生風雷	吁嗟 風雷を生ず
文章得其微	文章 其の微を得て
物象由我裁	物象 我に由りて裁つ
5 宋玉遲大句	宋玉 大句を遅くし
李白飛狂才	李白 狂才を飛ばす
苟非聖賢心	苟も聖賢の心に非ざれば
孰与造化該	孰か造化と該たらん
勉矣鄭夫子	勉めよ 鄭夫子
10 驪珠今始胎	驪珠 今始めて胎す

第一・二句は、天地が詩人の胸に入ると、ため息から風や雷が生まれるという。つまり、詩を作ることとは、天地の自然を自由に操ることなのである。言い換えれば、詩歌の創作は造物主の働きに等しいことになる。「胸臆」は、晋の陸機「文賦」(『文選』卷一七)に「思風発於胸臆、言泉流於唇齒」とあるのに基づく。創作の神秘性について述べた一節に見える。「風雷」は、梁の劉勰『文心雕竜』序志第五十に「擬耳目於日月、方声氣乎風雷」とあるのに基づく。肉体を自然現象になぞらえている。第三・四句は、創作の神髄について述べる。詩人が主観的に描く対象を造型しうるこそが、創作の神髄なのだという。「文章」という語は、魏の文帝「典論論文」(『文選』卷五二)に見える、「蓋文章経国之大業、不朽之盛事」ということはを想起させる。文学批評の作品に典故を持つことばを続けて用いているのは、偶然ではあるまい。

第五・六句は、創作の神髄をきわめた詩人の例を挙げる。宋玉は、屈原の弟子で、『文選』卷一九に「高唐賦」「神女賦」などの作品が載っている。「大句」は、韓愈と孟郊の「城南聯句」(『昌黎先生集』卷八)に、「大句幹

玄造（孟郊）、高言軋背嶂（韓愈）」と見える。すぐれた詩句が、宇宙を回転させるという。李白は、幻想的な詩風で知られる。世界の秩序を狂わせるほどの想像力の活用という点で、孟郊は宋玉と李白を讃えていると思われる。第七・八句は、詩歌の創作が造物主の働きに匹敵することをいう。ただし、そのためには、詩歌の才能だけでなく、聖賢の心が必要となる。第九・一〇句は、鄭魴を激励することばである。驪珠、つまり黒竜のあごの下にある玉とは、鄭魴のすぐれた文才のたとえ。宿されたばかりの若い才能に期待している。

孟郊によれば、詩歌の創作は、造物主が万物を創造する行為に匹敵するという。つまり、詩は世界を創るのがある。それでは、詩人が世界を創造するというのは、どういうことなのだろうか。孟郊は、『送淡公十二首』其十二（巻八）の冒頭で、次のように述べている。

詩人苦為詩 詩人 苦しみて詩を為るは

不如脫空飛 空に脱して飛ぶに如かず

詩人が苦しんで詩を作るより、鳥のように自由に空を飛ぶ方がよいという。もちろん、孟郊は本気でそのように思っていない。みずから苦しんで詩を作る道を選んだのだから、自虐的なポーズと理解すればよいだろう。「脱空飛」は、『淮南子』巻一・原道訓に「鳥排虚而飛、獸馳実而走」とあるのを踏まえる。そこでは、鳥が空をおしわけて飛ぶのも、獣が大地を踏んで走るのも、「天地之性也」と言っている。鳥の飛翔は、天地の自然を象徴する。孟郊は、作詩するより天地の自然に従う方がよいと言っているのである。逆に見れば、作詩は自然の道に反する行為ということになる。つまり、詩人はことばによって反自然＝人工の世界を創り出す。詩が世界を創るとは、そういうことだ。孟郊はそれを詩人の使命と見る。

自然の世界に対して、人工の世界を反世界と呼ぶこともできよう。反世界の創造は、天に対する反逆行為にはかならない。反逆者には、代償が求められる。孟郊は、そのことをよく知っていた。『夜感自遣』（巻三）の前半



で、次のように述べている。

夜学曉未休	夜学びて曉に未だ休めず
苦吟神鬼愁	苦吟 神鬼愁う
如何不自閑	如何ぞ 自ら閑にせず
心与身為讎	心と身 讎と為るや

孟郊は、休むいとまもなく、精神と肉体を敵同士にしてまで、苦吟に没頭する<sup>(15)</sup>。精神と肉体を痛めつけるのは、孟郊が反世界の創造と引き換えに、みずから求めた代償と言えるだろう。それが、孟郊における苦吟の意味であった。

晩年の感慨を述べた「冬日」(卷三)と題する詩の中に、次のような一節がある。

万事有何味	万事 何の味有りや
一生虚自囚	一生 虚しく自ら囚う
不知文字利	文字の利を知らず
到死空遨遊	死に到るまで空しく遨遊す

自分の一生を顧みて、文字の間に自分を閉じこめて作詩した意味が認められないという。詩人として生きるこ  
とへの懷疑の表明である。だが、このような自己否定は、孟郊の本質を裏側からあぶり出している。「自囚」、つ  
まり、自分で自分を詩という牢獄に閉じこめた詩人、それが孟郊なのだった。金の元好問が「論詩三十首」(『遺  
山先生文集』卷一一)の中で、孟郊について次のように述べるのは、右の詩を踏まえてのことだろう。

東野窮愁死不休 東野の窮愁 死して休まず

高天厚地一詩囚 高天厚地の一詩囚

「高天」「厚地」は、『詩経』小雅の「正月」に「謂天蓋高、不敢不局。謂地蓋厚、不敢不蹕」とあるのに基づく。天は高いというけれども、背中を曲げて歩かずにいられない、地は厚いというけれども、ぬきあしで歩かずにいられない、の意。天は高く、地は厚くとも、まったく危険がないわけではない。かみなりが鳴ることもあれば、地面が陥没することもある。そのような危険を恐れて、人々はびくびくしている。人民が政治に苦しめられるようすを描いた詩。元好問には、孟郊が広い天地の間を、びくびく生きているように見えたのだろう。孟郊を、「詩囚」、詩の中に自分を閉じこめた囚人、と呼んでいる。これは、孟郊の本質をよくとらえたことばだと思う。孟郊は詩という牢獄の中にみずからを閉じこめた。孟郊にとって、詩を作ることは、みずからを処罰する行為だったのである。それは、反世界を創造するための重い代償でもあった。

注

(1) テキストは、四部叢刊本『孟東野詩集』を用いた。孟郊の詩の説解には、陳延傑『孟東野詩注』（新文豊出版公司、一九七九）、劉斯翰選注『孟郊賈島詩選』（三聯書店香港分店、一九八六）、華忱之・喻学才『孟郊詩集校注』（人民文学出版社、一九九五）、韓泉欣『孟郊集校注』（浙江古籍出版社、一九九五）、邱燮友・李建崑『孟郊詩集校注』（新文豊出版公司、一九九七）、郝世峰『孟郊詩集箋注』（河北教育出版社、二〇〇二）を参考にした。また、孟郊の年譜は、華忱之・喻学才、韓泉欣、邱燮友・李建崑の校注本に収められたものを利用した。

(2) 韓愈に「長安交遊者贈孟郊」（『昌黎先生集』卷一）と題する詩があつて、次のように述べている。「長安交遊者、貧富各有徒。親朋相過時、亦各有以娛。陋室有文史、高門有笙琴。何能弁榮悴、且欲分賢愚。」貧富の差に応じて、それぞれ楽しみ方があると、孟郊にさとした詩である。孟郊が貧富の差にこだわっていたから、韓愈は、貧賤にも楽しみが存することを教えたのだらう。ものごとに対するこだわりを捨てないかぎり、時の流れにまかせて生きること

はできない。

(3) 「孟郊の影」(『山形大学紀要(人文科学)』第一一巻第三号、一九八八)。背立氏はの中で、「孟郊は、不快と苦痛を通じてしか世界を実感できなかったという言い過ぎであろうか」とも述べている。

(4) 「論韓孟集団」(『中華文史論叢』第五一輯、上海古籍出版社、一九九三)。賈氏はの中で、「このような貧士の精神は後に韓孟集団または中晩唐における失意の士人の主要な心理的支柱となった」と述べている。

(5) 「孟郊詩論(上)——連作詩を中心に——」(『東洋文化研究所紀要』第六八冊、一九七六)。

(6) 「苦吟派の詩——孟郊試論——」(『中国文化——研究と教育——』一九八三)。横山氏はの中で、孟郊について、「官僚としては不遇であったが、詩人としてはかえって幸福であったのだ」とも書いている。

(7) 「中唐詩壇の研究」四〇八頁(創文社、二〇〇四)。

(8) このような逆説的な面白みは、「尋隠者不遇」詩と共通するものがある。石川忠久「尋隠者不遇」詩の生成について(『陶淵明とその時代』、研文出版、一九九四)を参照。

(9) 「文学のたのしみ」という考え方については、緑川英樹「文字之楽——梅堯臣晩年の唱和活動と『楽』の共同体——」(『中国文学報』第六五冊、二〇〇二)を参照。

(10) 「寒」や「瘦」が、新しい美意識の反映であることは、蕭占鵬「韓孟詩派研究」第二章に指摘がある。

(11) 斎藤茂「孟郊『峽哀』詩試論」(『文哲文学会報』第四号、一九七九)を参照。

(12) 和田英信「孟郊『寒溪九首』試論」(『集刊東洋学』第五八号、一九八七)を参照。

(13) 薄井信治「孟郊の交友論」(『宇宙工業高等専門学校研究報告』第三七号、一九九二)を参照。

(14) このような考え方については、川合康三「詩は世界を創るか——中唐における詩と造物——」(『終南山の変容——中唐文学論集』、研文出版、一九九九)を参照。

(15) 苦吟については、岡田充博「中晩唐期に見られる詩文学への没頭的风潮について——詩人達の文学的自覚の問題を中心として——」(『名古屋大学文学部研究論集』文学二六、一九八〇)を参照。

〔付記〕 本稿は、平成一六年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)「唐代における悲愁の文学」の研究成果である。